

第 1 部

三井所清典基調講演 「地域の復元力となる住まいとまちづくり」

- ・ 大学で仮設住宅の課題をやっておくべきだった。
- ・ いい街並みをつくることは一人ではできない設計事務所だけでもできない。連携大事。
- ・ 土木だけで作ったものは×
- ・ ライバルはハウスメーカー？
- ・ J I A が「地域に根ざす」といい始めた。これで連携できる。
- ・ 道路が正面で、反対側の水路面は裏側。だったのを逆転して。建築の役割。
- ・ 勾配屋根で建築を作ること。
- ・ 珍しい形は不要、外は普通でも中は現代のもの。
- ・ 伝統構法で設計すると大工も喜ぶ。
- ・ 屋根を架けた普通の家をやらせてみると、大工も設計者もうまい。染み付いているから。
- ・ 道路と建築の関係をうまくやって、街並みをよくする。灯籠。など。
- ・ 勉強会を重ねて、工務店でも考えていいものができるようになっていった（有田）
- ・ 公共建築、その過程でどう成長するのか。
- ・ 地元の生活文化を大事に。
- ・ 講習会他、やりっぱなしではなくそのあとに必ず協議して、共有、交換する時間をもつ。
- ・ 大工に敬意を持っている設計者・大工に馬鹿にされない設計者
- ・ 室内が 0℃以下になるところでは、凍ってはいけないものは冷蔵庫に入れる！
- ・ 樹木は 2 m 以上ないと雪に埋もれる。
- ・ 屋根の雪、3 寸 5 分で滑る。四寸では滑らない。
- ・ 雪割棟ガラスにすれば日光もとおる。
- ・ 雪のため地上 1.5m まで石積として持ち上げて、軒高を高くして積雪に対応する。
- ・ 土地の、いろんな条件を克服してきた民家は美しい。
- ・ 徳島らしい建築の現代版を、方言のような建築をつくる！
- ・ 標準語の建築、英語の建築、イタリア語の建築作ってはダメ。
- ・ 玄関は南に。
- ・ 未完の家を。昔はそうだった。一気にやってしまわずに、成長する家を。
- ・ 山古志で、おばあちゃんに「品がいい」といわれて嬉しかった。
- ・ 地域社会を崩さないように。
- ・ 建築側で修景を提案する。
- ・ 変わる姿を見せる。
- ・ 寒くて梅桃桜と一緒に咲くといわれる福島県三春町紫雲寺 25 年ぶりの本堂建設。
- ・ 下小屋に見学。どんな人がどのようにつくっているのか。
- ・ 「人がやっている、人が手で作っている」姿を見る。感銘をうけて意識が変わる。

- ・ 都城の五重塔、38条申請。
- ・ 木組みベース、めり込んで復元、木構造の仕様書に入る予定。
- ・ せん断ボルトは、「豆腐に針金を通して吊り上げるようなもの」
- ・ 坂本、稲山、三井所三者ですすめている。
- ・ 木造にも西洋的なもの日本的なものがある。地元のできるように！

第2部

田口

- ・ 四団体はおよそ・・・

建築士会：県下9支部あって全県に広がっている。

事務所協会：事業者の団体。徳島市を中心に。

→この2団体は行政とのつながりも太く、オーソライズされている。

建築学会：学術団体。

J I A：専業有志の団体。

→この2団体は会員数は少ないが全国の先端の知見と直結している。

- ・・・というイメージ。それぞれの会長さんにそれぞれの会の紹介をお願いします。

佐藤（建築士会）

- ・ 「隣の方は建築士さんよ」というように一般の方に認知されるような運動を。
- ・ 応急危険度判定、避難施設にできるかどうかなど、学校の点検も始まっている。

西田（事務所協会）

- ・ 耐震化促進事業。県とのつながり強い。なにかあったらすぐ動く。
- ・ 応急危険度判定、罹災証明、被災度区分認定（これは有償）と、順を追って携わる。
- ・ 建築士会会員としてはボランティアで行かないと、と、思っている。
- ・ ただ、全部ボランティアでは立ち行かない。
- ・ 事業者が参加するにはペイできることが必要。システムができていないと続かない。

田口

- ・ 設計者自身のBCPですね。

新居（建築学会）

- ・ 環境連続シンポジウムを予定している。
- ・ 復興コミュニティアーキテクト法に取り組んでいる。
- ・ 耐震診断、親身に考えたい。
- ・ コミュニケーションが大事。実情を知らなさ過ぎる。ご近所と挨拶をすることから。足元周りを知ることから。タウンアーキテクトに。近所の人に挨拶ができない先生に何ができますか？
- ・ 先生の「地域力」を生かす。

- ・ 個人情報などの関係で学会内のコミュニケーションも難しい。

田口

- ・ 情報は落ちてくるが何もできない現状・・・。

伊月（J I A）

- ・ 本部⇔支部⇔地域会 単一会なので連系が太い。
- ・ 地域会員が本部の委員会の委員でもあり、東京の情報がダイレクトにおりてくる。
- ・ 津波が来ると徳島高知が被害を受ける。事前復興、対策を協議し始めている。愛媛香川がサポートを。最初は意識が違っていたが、共有でき始めている。
- ・ 四国全体で話しをすると、温度差が平均化されていく、直接性と柔軟性がいいところ。

田口

- ・ 四団体それぞれ特徴がある。連携作る、連合することでの力とは？

佐藤

- ・ 大工、監督、一緒にやっていることがメリットだったが、設計者の会という方向になってきて、退会者が多い。

西田

- ・ これからです。
- ・ 被災の規模によって対応の仕方も違うのでは。
- ・ 場所のシミュレーションも。
- ・ 阪神淡路のとき、周辺自治体の対応はどうだったかなど。
- ・ 一緒になって勉強していきましょう。

伊月

- ・ 事前にできること？まずは自分達ができるだけ無事でいられるようにしておくこと。
- ・ だれが動けるのか把握しておくための訓練。
- ・ まずは家族のこと。落ち着いて初めて専門家として何ができるか考えておく。
- ・ 地域での挨拶、近所づきあい、復興にも大きなこと。
- ・ エリアアーキテクト。2 kmのマスで地図を分割してみて、ここには誰が居る、どう動く、と考えるみると身近にわかり始めるのでは。
- ・ そこで4会の連携があれば、いろいろ可能になってくるのでは。

田口

- ・ 少数精鋭でも、ネットワークと連携すれば。

伊月

- ・ J I Aは役所とのつながりが弱い。そこを他団体、公的な団体の方々につなげてもらえたら、大きなメリットがある！

田口

- ・ リアルなおとしどころ。学会 J I Aは頭でっかち？士会、事務協との情報交換で有効に。

佐藤

- ・ 逆に行政は士会や我々団体にどんな役割をと？
- ・ 今は被災地で、マジメにやっている人が疲弊していく・・・。
- ・ どのように支援できるのか、災害ファンド？
- ・ 連携することでできる防災準備を。役割分担ははっきりと。
- ・ お金。行政にはここをかんがえてほしい。
- ・ まず知ってもらうこと。ベースの事から。行政にも後押ししてほしい。

新居

- ・ 災害をテーマに、持続可能性を四会で考える。意識しあって動くことそのものに可能性がある。
- ・ J I A の環境行動ラボ、地球環境、災害、省エネ・・・
- ・ ワンパターンでなく、地域に根ざしたものを。

伊月

- ・ 四会連合何が必要？ネットワーク作りでは。
- ・ 復興にあたり、建築家だけではなく、さまざまな専門家が必要になる。土地も動く。
- ・ 行政中心に、専門家との協働を強くしていく。その中の建築担当がこの四団体である。
- ・ 大学も含めた総合的な専門家の連合が必須。

小坂（美波町由岐支所）

- ・ 事前復興、木岐の自分の竹林で地域防災研究会や木造建築研究会とすすめている。
- ・ 耐震診断もいいが、被災時に凶器になるものの撤去も大きな問題。
- ・ 空き家が崩れて避難路をふさぐ、CB塀が倒れる。などなど・・・
- ・ 事前にくわしい説明は必要だが「勧告」でもいいので行政から出してほしい。

- ・ 県へ進言すれば国へあげてもらえる。
- ・ 牟岐町もすでに動き始めている。
- ・ 「うごき」には、世代交代できる受け皿が必要。
- ・ 今日科技高の高校生が聞いてくれたことは意味がある。
- ・ より広い分野の専門家との協働へ。

三井所

- ・ 素晴らしい会がここで開催されているという実感。うれしい気持ちでいっぱい。
- ・ 新潟では、田口さんの教え子が引き継いでしっかりやっている。おめでとうございます。
- ・ 有田では、確認申請を出している全ての設計者に声をかけた。
- ・ 集まったのは団体に入っていない人ばかりだった。
- ・ 四会に入っていない人をふくめてどう連携していくのか・・・
- ・ 防災、環境はみんなでいっしょにやらないと！一緒に要望書を出すこと！！
- ・ 福島での木造仮設住宅。事務賞、士会、J I A 三会に頼むようにした。
- ・ コンバット、チームでつくる。

- いいかげんにつくっても30年はもってしまう。はじめからいいものをつくらないと。
- 設計者と工務店チームが年間100棟作る能力があるとする。
- 被災して一年で1000棟必要になったときに、のこりの900棟をプレハブメーカーということにならないように。他地域とも連携しながら体制をシミュレーションしておく。
- 未完成であることが大事。終わると同時に仕事がなくなるのではだめ。
- 未完成にして、成長し続ける。職人の関与がずっと必要なしくみを。
- 左官仕事も入れる。なくなってしまう。全ての職種が関る設計にすること！
- 作る過程を見せることで、ものづくりが社会化する。復権へ。
- 人間が、手で、ものを生み出す様を見て、ものを大事にする気持ちが生まれる。

林

- 防災まちづくり教育を。こどもへ。